



銅山の神様を奉った本山山神社には経堂にかかわった三菱のマークが付いている



吹屋銅光案内所前にはベンガラ色をした銅山職人の看板が掲げられている



ベンガラ色の屋根瓦が重なる様子を見た瞬間、黄昏時のフレンチェの町を思い出した

思いがした。茜色に染まっているのは心安らぐ

伝わる銅山の歴史に幕を閉じる。吹屋のもうひとつの顔、赤色顔料のベンガラは江戸時代の宝永4(1707)年に始まるといわれる。ベンガラの主成分は酸化第一鉄で、インドのベンガル地方から輸入したことから、「ベンガラ」と呼ぶようになったのだとか。用途は多彩で、輪島塗などの漆器や九谷焼や伊万里焼といった陶磁器の赤絵に欠かせず、防腐剤の役割もあることから、建築木材の塗料や船底の塗料にも使用されている。ベンガラ生産を大きく飛躍させ

たものは、中間製品であるローハの生産供給という。銅山、吹屋には、銅を採り終えたあとの捨石がたくさん残されたが、この捨石から硫化鉄鉱が大量に産出され、ローハを生み出すことに成功したという。米一升が10銭のとき、ローハ百匁(375g)は60銭の高値が付き、まさにゴミから巨額の富が生み出されたのだ。だが、銅山の閉山により、原料の捨石が手に入らなくなり、昭和49年、最後まで残った、田村家のベンガラ工場も閉鎖されることと

縫って上り詰めていく。台風の影響だろうか？ うっそうとした林の中に、杉の木が何本も倒れているのが見えた。吹屋の集落があるのは標高約500mと聞いたが、想像以上に、山深い場所にあるようだ。やがて視界が広がり、バスの座席の位置から見下ろすように、軒高の低い茜色の家並みが見え始める。バスに乗ること約55分。「吹屋」にはほぼ定刻に到着した。吹屋の屋根瓦は石州(島根県)から呼び寄せた瓦職人が吹屋近隣の宇治町に瓦窯を造り、地元で瓦を焼いたものという。一見、同じ色に見えるが、近くで見ると、グレーがかかった色や青みを帯びたもの、茶が強いもの、ピンク色というように、焼き具合によって微妙に色合いが異なる。さらに、光の射し込み具合によってもグラデーションが変わり、これが景観に深みを与えている。先ほど、ヒガンバナの強烈な赤を目にしただけに、町全体がほんのりと茜色に染まっているのは心安らぐ

茜色に染まる町並みへ

高梁市・吹屋地区

末松 千尋

岡山県中西部に位置する吹屋。そこだけ夕焼けが射し込んだように、ほんのり色づいたベンガラ格子や赤い土壁、赤銅色した石州瓦の家々が並ぶ。江戸、明治大庄にかけて、銅山として栄えた上に、さらに、江戸後期からはベンガラ生産で潤った町では、ベンガラ業者やベンガラ製造人たちによって、風情ある商家や町家が造られた。茜色に彩られた町並みは、昭和52(1977)年、岡山県とこの町よりの早稲、重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

2006年9月25日〜26日

銅山とベンガラで栄えた山間の町並み

JR備中高梁駅より、「吹屋」行き備中バスに乗り継ぐ。そろそろ刈り入れシーズンを迎えているのだろう。車窓に秋の陽光を浴びて金色に輝く稲穂が映る。次の瞬間、畦道に真っ赤なヒガンバナが目に入り、不意に子ども頃、この花が苦

のだと思う。こんなふうには、旅先でふと目にしたり、耳にしたことが、遠い日の記憶を呼び覚ますことはよくあることだ。と同時に、今旅の途中で見たり感じたことも、新たな記憶として私の中に刻まれていくのだろう。バスはしばらく川に沿って走っていたが、橋を渡って県道85号に入ると、本格的な上り道と



緩やかな坂道の旧道の両脇にベンガラ色に彩られた家々が連なる

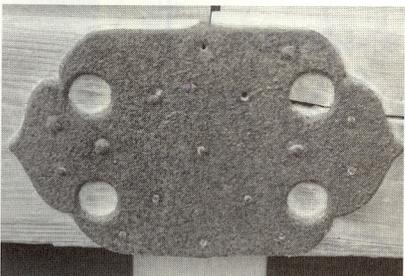


郵便局の建物もベンガラ色に彩られている

手だった記憶が蘇る。妖しいまでに艶かしく、凄みのある赤い色に圧倒された。吹屋は江戸時代末期から明治時代にかけて、銅山とベンガラの生産で栄えた町で知られる。経営者は幾度か変遷したが、明治に入り、莫大な資金と近代技術を持つ、三菱の岩崎弥太郎による経営により、銅山経営はひとつのピークを迎える。銅山の中枢部、坂本には、社宅や病院、「共楽館」という劇場まで造られ賑わいを見せていたという。しかし、第一次大戦後の不況や、世界大恐慌により昭和4年にいったん閉山。戦後まもない昭和25年に再開したものの、オイルショックの影響を受け、昭和47年、平安時代に始まったと



茜色に色づいたベンガラ館にコスモスのピンクが映える



鉄製の框飾りが付いた家は4軒ほど
こちらそれぞれ模様が違う



外国人向けの宿泊施設、吹屋国際交流ヴィラもある

の短い旅の間では
数人の小学生をの
ぞくと、出会ったの
は70歳以上と思わ
れる方々ばかりだ
った。茜色に染まっ
た家々たちは、静か
にそこに佇みなが
ら、新たな世代に引
き継がれるときを
じっくり待ってい
るようにも思えた。

ふるさと村に指定される。これは
伝統的な町並みを中心とした町の
振興をはかったもので、このとき
「郷土館」「ベンガラ館」はじめ、「国
際交流ヴィラ」「古い坑道」などが整
備され誕生した。長尾さんは初代の
村長となる。さらに、昭和52年、
岡山県で最初に「重要伝統的建造物
群保存地区」に選定された際も、積
極的に調査にかかわったという。銅
山やベンガラ産業の閉鎖まもない
時期に手を打つたため、取り壊され
る家も少なく、往時の栄華を随所に
残す町並みそのまま残されたこ
とは大きい。現在、やはり孫を持つ

年齢の娘さんが、喫茶「楓」を営みな
がら、長尾さんの遺志を継いでいる
という。
「こちら「ベンガラ館」で伺った
のだが、吹屋でベンガラが発見され
るにいたったエピソードがおもしろ
い。旦那衆のひとりが雨の日に、
火鉢の焼け石を庭に捨てたところ、
雨に当たった石から赤い水が染み
出したため、銚子を焼いて水洗いを
すれば、赤い塗料ができるのではな
いか、そうひらめいたのだという。
時の代官、早川八郎左衛門氏も進ん
でベンガラ製造を奨励、株仲間を作
るように申し渡し、吹屋ベンガラの

値下げ競争を禁止することで、商品
の品質の安定や発展に力を尽くし
たという。ふと思っただが、もし、
晴れた日に焼け石を捨てたのだと
したら、はたまた、焼け石が赤い色
に変わったことに気付かずにと
ら、そして、代官が吹屋ベンガラ製
造を奨励しなかったら、吹屋の町並
みはこの世に生まれていなかった
のかもしれない。
ベンガラ豪商たちの願いを実現
した家々は、最盛期には180軒ほ
ど建っていたという。そのうちの
77軒が残り、町を想う人々によつ
て、大切に守られている。1泊2日

孫がいる年齢の女性が 元気に働き暮らす町

統一感のある町並みとなった背景
には、ベンガラ豪商たちが合議しあ
い、財力にものをいわせて個々が好
き勝手に家を建てるのではなく、美
観に配慮して、石州から宮大工を呼
び寄せて造らせた結果だが、妙に窮
屈なことせず、妻入りと平入りの
家が適度に混ざり合い、なまこ壁や
格子戸、框飾りの金物なども、家こ
とに趣向を凝らして造つたため、1
軒1軒がおしゃれで、町並み全体も
モダンな印象を持つ。何より、町に
流れるリベラルな雰囲気が好き。
家の意匠に見惚れて、シャッター
を切る私に、「「苦勞様」と声をか
けていく人や、ロケの撮影が先日あ
つたなど、話をしてくださる人など
ほどよい距離を保ちながらも、観光
客に対する気遣いが感じられる。旧
片山邸、吹屋観光案内所など、いず
れも孫がいると思われる年齢の女
性が窓口となり対応をしていたが、
町に対する愛着を持ちながら活き
活きと働いている様子が印象に残

つた。とくに、
吹屋観光案内
所では一人ひ
とりに丁寧な
対応をしてい
た。風が通り
抜ける家の中
に椅子が置か
れ、のんびり
していると、
手作りの漬物
や煮物を勧め
られ、ごちそうになった。
「町が残つたのは長尾隆さんのお
かげです。すでに亡くなられました
が、町の恩人だと思っております」
と、そう熱く語ってくださいしたのは
「ベンガラ館」で受付をしていた女
性だ。70を過ぎていくから物を覚
えるのが大変と謙遜するものの、町
の話を伝えるのは自分の使命とば
かりに、凛とした雰囲気を使わね
ながら、ひとたび町の歴史や銅山、ベ
ンガラの話を始めると、立て板に水
といった具合に話が続く。具体的な
数字を盛り込みながら、たまたま
はない博識ぶりだ。興味深い話に惹



思わず足をとめて眺めてしまった
珍しいドック模様ななまこ壁



七宝模様なこ壁があるお宅は7軒
あつたが、模様まじりも異なる

き込まれ、お茶やコーヒー、朝とつ
たばかりというブドウと、クリを遠
慮なくいただくながら、つい長居を
してしまつた。
その女性が絶賛する、長尾隆さん
とはベンガラ豪商の本長尾家の元
当主だった方という。昭和47年に
銅山が閉鎖され、昭和49年にはベ
ンガラ工場も廃業。斜陽となった
集落に再び活気を呼び戻そうと、町
並みの重要性をいち早く訴え、町並
み保存に情熱をかけたのが長尾隆
さんだったという。長尾さんの働き
かけが功を奏し、昭和49年、吹屋
は岡山県の整備事業のひとつ「吹屋